東方キャラSS008　風見幽香

深鏡椋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方キャラＳＳ００８　風見幽香

【Ｎコード】
Ｎ６７４５Ｈ

【作者名】
深鏡椋

【あらすじ】
太陽の畑を訪れた霊夢。霊夢は一人の人物に会うために訪れたのだが。

太陽の畑。夏には向日葵で黄色く染められるこの地には一人の妖怪が住んでいる。

名を風見幽香という。

太陽の畑に足を踏み込んだ者には容赦のない弾幕を笑顔で降り注ぐ彼女を、人間はもちろん、妖怪も妖精も畏怖し、恐怖した。

そんな彼女の元を多少面倒に思いつつも私は訪ねた。

「幽香～！いるんでしょ～？」

そんな私の声にすぐさま背後から返答があった。

「霊夢？珍しいわね、また異変？それとも弾幕の洗礼をご所望？」

紫にしても、幽香にしても、妖怪というのは前触れもなく背後から姿を現したいらしい。

振り返れば、緑の髪の少女が背後に立っていた。

「どちらも違うわよ。ほら、おはぎ作ったの。食べる？」

手にした包みを解くとそこには確かにお重に入ったおはぎがあった。

「ふふ、どういう風の吹き回しかしら？」

「幽香に食べてもらおうと思って……」

「……どういう風の吹き回しかしら？」

……食えないなぁ。

「貴女への用事があってね。これは、魔理沙や翠香が来ることを見越して多めに作ったら、二人とも来ないのよ。ということでおすそ分け」

「あら？私は魔理沙と翠香のかわり？」

「そういうことになるわね。不満？」

「いいえ、おはぎに罪はないわ」

幽香に箸を手渡すと笑顔で受け取り、おはぎに伸ばす。
上品に一口。
瞼を閉じて、おはぎを味わう。
「美味しいわよ、霊夢」
「そう、ありがとう」
「でも、私はきな粉のほうが好みだわ」
「なに？おはぎじゃ不満？」
「いいえ、不満はないわよ。むしろ満足してるわ。でも、私はきな粉のほうが好みだわ」
「あー……わかったわよ、次、作ってくるわよ」
「よろしくね」
屈託のない笑顔を浮かべる幽香。
いつのまにか、幽香は二つ目のおはぎを口にしていた。
本当に油断ならないなぁ。
私は、視線を幽香から太陽の畑の風景に移した。
「私の勝手なイメージだけど、太陽の畑はいつもヒマワリが咲いているイメージがあるわ」
「梅雨前のこの時期に咲いているヒマワリなんて、ヒマワリと呼べるのかしら？」
ヒマワリは育っているが、花が咲いているはずもない。
「どうしても、というなら咲かせるわよ？でも、かわいそうだとは思わない？」
「かわいそう？」
「ええ。芽生え、育ち、花を咲かせ、受粉し、枯れて……種を残す。今咲かせればそのサイクルは短くなる。ヒマワリは恋焦がれる夏を待たずして枯れるのよ」
「……そもそも、命の短い花をどうして貴女は愛すのかしら？」
「愚問ね。命が短いからこそ、美しいのよ。そして、精一杯生きて欲しいと思う」
まだ自己主張も控えめなヒマワリを愛おしそうに幽香は撫でた。

「ねぇ、妖怪の寿命に比べれば、人間の寿命って短いわねー」
「わかったわよ。人間を殺すなって言いたいのね」
「話が早くて助かるわ」
「確かに、人間の寿命は短いわ。短いからこそ、精一杯生きて欲しい。だから殺さないで欲しい、でしょ？」
「ええ。どうやら近くで子供が遊び場にしているみたいなのよ。こちらから注意は促すつもりだけど、その前に子供が太陽の丘に来る可能性もあるからね」
「高いおはぎになったわね」
気づけば、８コ入っていたおはぎは姿を消していた。
……妖怪も太ればいいのに……。
「約束よ？さて、幽香の顔も見れたし、人里のほうに注意するよう伝えてくるわ」
「私の顔？私と約束させるほうが本題だったくせに」
「……言い訳はしないわよ」
「……きな粉」
「わかったわよっ！じゃあ、よろしくねっ！」
幽香が頷くのを確認してから、私は人里に向けて飛び立った。

「……なんだろ、ここ」
少女が太陽の畑を訪れたのは私が飛び立ってすぐのことだった。
そんな侵入者を幽香が見逃すはずもなかった。
「ここは太陽の畑。ここに用事はないでしょう？」
歳は７つほど。
幽香は少女に笑顔を向けた。
普段なら、その笑顔は死を意味する笑顔。
今回は約束もあるので幽香に殺意はない。
内心、「おはぎじゃ割にあわない」と思っているに違いない。
「……どうかしたのかしら？」

少女は幽香を見つめたまま、動こうとしない。
しばしの時間を置いて、少女はようやく一言口にした。
「お姉さん、綺麗」
「そう？ありがとう」
「私、お姉さんみたいになれるかな？」
いつも笑顔の幽香だが、一瞬表情がなくなった。
再び笑顔を浮かべると、手には青い薔薇と紫の薔薇を手にしていた。
「こんな薔薇初めてみた！！」
「この青い薔薇はね、青い水を吸わせて無理やり青くしているの。そして、この紫の薔薇は品種改良といって、青い薔薇を生み出すために人間の手によって作られた薔薇よ」
「そうなんだ！綺麗ね」
「どちらが綺麗に見えるかしら？」
少女の前に二つの薔薇を差し出した。
「私、赤い薔薇が好き」
そんな少女の返答に、幽香は右手を少女の頭の上に乗せた。
「そうよ。薔薇は赤いもの。無理やり青くするものでも、努力して青くするものでもないわ」
「どういうこと？」
「あなたは、あなたのままでいいのよ。それが一番綺麗なの。きっと私よりも綺麗なるわ」
そういって青と紫の薔薇を掌に収め、ぎゅっと握る。
再び手を開けば赤い薔薇が姿を現した。
「ここにはもう来ないのよ。これはその約束」
その薔薇はブローチ。
少女の胸にそのブローチを着けてあげると、幽香は優しげな微笑みを浮かべた。
「もし、この薔薇に負けない美しさを身につけたら、いらっしゃい」

「うん！」
「……まってるわ」
「うん！待っててね、お姉さん！」
手を振りながら走り去っていく少女に見えなくなるまで、幽香は手を振っていた。
……私は、幽香にばれないように太陽の畑を後にした。
きっと話せば幽香の珍しい表情が見れるかもしれない。
でも。
そんな表情よりも、今の優しい笑顔のほうが何倍も価値があるように思えるから。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6745h/

東方キャラSS008　風見幽香

2010年10月8日15時44分発行